

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：22401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2021

課題番号：15K20735

研究課題名（和文）初めて親となる男性の父親役割獲得を促進する出生前看護介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Prenatal intervention program for Japanese first-time fathers to adapt to the paternal role

研究代表者

荒川 亜希子（森田亜希子）（MORITA, AKIKO）

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：10402629

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は父親の役割に適応するための父親アイデンティティの形成に焦点を当てた出生前看護介入プログラムを開発することを目的とした。看護介入は独自に開発した父親ポートフォリオを用い、産後のスケジュール作成や沐浴指導等を行った。介入前後の効果は、混合法の収束的デザインを用いて2群間で定量的に評価した。また参加者にインタビューし、実際の産後の父親役割行動と効果的な出産前教育を調査した。介入群10組、対照群31組であった。評価データのグループ間比較では有意差は認められなかった。しかし質的な結果から参加者全員が介入目標を達成したことを確認し、効果的な看護介入が行われたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

父親がその家族に合わせた役割行動を実践できるよう、児の出生前に父親としての自己像を形成することに焦点を当てた看護介入プログラムを開発し、介入群10組に実施、対照群31組と評価データを比較した。その結果、有意差は認められなかったが、質的な結果から効果的な看護介入が明らかとなり、全員の介入目標の達成を確認した。本結果が臨床応用されることで父親の役割獲得課題が達成され、第1子出生後に父親が円滑に役割行動をとれるようになると考え意義深い研究であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a prenatal intervention program focused on the formation of paternal identity for adapting to the paternal role. The intervention program allowed participants to create a postpartum schedule using a uniquely developed paternity portfolio. Pre and postintervention effects were evaluated using a convergent design of mixed methods. This intervention effect was quantitatively evaluated between the two groups. To qualitatively examine the intervention's effects, participants were interviewed for effective prenatal education, and their paternal role behaviors were identified by the intervention. There were 10 pairs in the intervention group and 31 pairs in the control group. Intergroup comparison of evaluation data showed no significant difference. However, qualitative results clarified the effective nursing intervention, confirming the achievement of intervention goals by all participants.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：父親役割 出生前教育 看護介入 産後うつ 育児ストレス 夫婦関係 ポートフォリオ

1. 研究開始当初の背景

近年、日本では父親の育児参加を積極的に推奨し、ワークライフバランスの実現に取り組んでいる。しかし男性の育児休業取得率は他の先進国に比べて極めて低い水準である¹⁾。夫婦の家庭内役割分担では、夫が担う役割は少ない²⁾。また父親は、育児参加を求められる一方で、父親役割不適應等により生後1か月児をもつ父親の11~13%が抑うつ状態にあり³⁾、産後うつは母親の問題だけではなくなっている。さらに夫婦関係満足度も児の出生後に低下している⁴⁾ことが報告されている。

親への移行期における父親役割適応と予期的準備について、Ferketichら⁵⁾が着手し、予期的、形式的、非形式的、個人的段階の4段階を定義した役割理論を枠組みとして父親役割能力と父性性獲得について調査し、最終的に父親がアイデンティティを確立する個人的段階に至ることを明らかにした。予期的段階から父親役割適応を促進するための準備が必要であることは、多くの研究でも言われている。父親の予期的段階に行う準備について、Galinsky⁶⁾は妊娠期をイメージ形成期とよび、親となることでどのようなことが生じてくるのかをイメージし、出産の準備をする時期であると述べた。日本においても、諸外国に遅れて父親役割獲得過程に関する研究が着手され、父親像の形成が重要であることが明らかにされた⁷⁾。また妊娠期における父親のイメージについて、理想像をもつ父親はもたない父親に比べて家事育児行動の内面的動機が高いことが明らかにされた。これらのことから、児の出生後早期から父親役割適応を促すためには、児の出生前から、具体的かつ実現可能なレベルで自分なりの父親役割行動が説明でき、この子の父親であるというアイデンティティを形成していく、すなわち父親としての自己像形成のための支援が必要だと考えた。森田らは、児の出生前の親となる男性が出生後の父親役割行動を考える契機となった体験を明らかにした。そしてこの体験をもつための看護の方向性を示唆した。しかし父親としての自己像形成に焦点を当てた父親役割適応を促す出生前看護介入研究は行われていない。

本研究により開発された看護介入プログラムが臨床応用されることで、父親としての自己像形成という課題が達成され、第1子出生後に父親が円滑に役割行動をとることができると考え、臨床的にも意義深いと考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、独自に考案した初めて親となる男性の父親役割適応を促す出生前看護介入プログラムの効果を見るの出生前後に量的質的に検討し、その結果から、看護介入内容を見直し、精練して出産前の父親役割適応に有効な看護介入プログラムを開発することとした。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

研究デザインは混合研究法を用い、介入前後でデータ収集を行った。児の出生前に父親としての自己像を形成することに焦点を当て、独自に考案した出生前看護介入プログラムを介入群に実施した。標準的な看護を受けている対照群と、標準的な看護に加えて本看護介入を受けた介入群を比較して、考案した看護介入プログラムの効果を検討した。看護介入効果は、エジンバラ産後うつ病自己評価表、夫婦関係満足度、育児ストレスを両群で比較した。また、介入群においては、Mixed-methodの収束(convergent)デザイン⁸⁾を用いて、量的データと質的データの収集を同時期に同じ対象者に対して行い、量的データと質的データそれぞれの分析で得られた結果を用いて、比較または関連づけ解釈する方法とした。これらの結果に基づいて、看護介入プログラムを修正して改良版看護介入プログラムを開発した。

(2) 研究対象者

介入群、対照群ともに、以下の条件をすべて満たし、研究参加について説明を受けた後、研究参加に関して夫婦の同意が得られた第1子出生前の親となる男性とした。

条件は、初めて親となる日本人男性であること、胎児は単胎であること、夫婦と胎児は血縁関係があること、妊婦及び胎児は正常な経過であること、親となる男性は日常生活に支障をきたすような健康問題を有していないこと、夫婦と一緒に生活をしていること、日本語が堪能で、コミュニケーションが可能であること、介入後の面接及び児の出生後面接時に録音の許可が得られることとした。除外基準として、上記の条件を満たさないこと、さらに夫婦の同意を得て研究を開始した後でも以下の場合には研究対象者から除外した。基準は、研究対象者が研究協力辞退を申し出た場合、研究対象者に健康問題が生じた場合、妻及び子どもの妊娠・分娩・産褥経過に問題が生じた場合、とした。

(3) 看護介入

研究者によるこれまでの研究結果と文献検討により、親となる男性の児の出生前の課題は、具体的かつ実現可能なレベルで自分なりの父親役割行動が説明でき、この子の父親であるというアイデンティティを形成する、すなわち父親としての自己像形成を行うこととした。父親として

の自己像形成は、児の出生前に父親役割に気づく体験、父親役割モデルを探索、投影、取り込む体験、仕事と家庭内役割を調整する体験、育児準備に携わる体験、妻・わが子について理解を深める、という5つの体験を積み重ねることで促される。そして、児の出生前の課題を達成することで、児の出生後に円滑に父親役割行動の実践に至る、すなわち父親役割に適応する。父親役割に適応することで、父親の産後うつや育児ストレスは減少する、そして妻と調整しながら役割を担うことで夫婦関係も良好になると考えた。本研究では父親としての自己像形成を促す、5つの体験の充実を促す看護介入プログラムと目標を考案した。本看護介入プログラムは集団指導である出生前教育で、妻が妊娠後期時に1回実施した。看護介入では児の出生前後で目標を立て、目標達成に至る看護介入内容を検討した。児の出生前の上位目標を、児の出生前に自分なりの父親役割行動を具体的かつ実践可能なレベルで考えることができるとした。さらに下位目標を5つ立案した。また児の出生後の目標は、出生前に具体的にした父親役割行動を実践できること、また EPDS 得点が8点以下、夫婦関係満足度が低下しない、育児ストレスが高くないこととした。これらの目標を達成するための看護介入プログラムの内容は「スケジュール説明、自己紹介」「新生児の特徴に関する説明」「出生後の母親の体と心に関する説明」「出生後の生活に関する説明」「出生後の生活のスケジュール立案ワーク」「父親役割モデルの探索」「オリジナル沐浴動画の視聴と沐浴体験」であった。本看護介入プログラムには4つの独自性がある。1つ目は、研究者が独自に開発したパタニティポートフォリオ⁹⁾を活用し、父親となる自尊感情を高め、父親役割行動の内的動機づけを高めたことである。2つ目は各家庭に合わせて沐浴場所や道具を想定して行う沐浴体験を通じて、沐浴時の姿勢の工夫や新生児の更衣の場所等を夫婦で検討しながら育児の参加体験型学習を提供したことである。3つ目は産後の生活のスケジュール立案作業や家庭内役割分担チェックリストといった夫婦で取り組むことのできる作業を実施し、夫婦による子育て生活の話し合いを促進させたことである。4つ目は1回の開催に参加できる夫婦を5組未満とし少人数制で夫婦間の相互交流の場を提供したことである。

看護介入を実践する前に、看護介入を適切に運営するために初めて親となる男性とその妻を対象に本看護介入プログラムを実践した。実践後、対象者に看護介入の適切性についてアンケートを行い、得られた評価に対して母性看護学の専門家からスーパーバイズを受け、実際の看護介入を実施した。

(4) データ収集方法

研究対象者の抽出は、研究協力施設における選定法、スノーボールサンプリング法、施設で行われている出生前教育で研究の説明と依頼を行った。本研究は、ベースラインデータとして対照群を先にデータ収集し、募集予定人数が集まり次第、介入群のデータ収集を行った。対照群は、妻が妊娠後期にある時期に基本情報と QMI、EPDS を収集した。そして産後2か月時に追加基本情報、EPDS、QMI、PSI-SF を収集した。介入群はまず看護介入前に基本情報、EPDS、QMI を収集した。そして看護介入から約1週間後に、半構成的面接法にて看護介入により具体的となった自分なりの父親役割行動と、その自分なりの父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容について調査した。また産後2カ月に対象者の追加基本情報と EPDS、QMI、PSI-SF を収集した。加えて、半構成的面接法にて実際に行っている父親役割行動と、その父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容を収集した。

(5) 分析方法

看護介入プログラムの効果は、産後うつ (EPDS)、夫婦関係満足度 (QMI)、育児ストレス (PSI-SF) の3つのアウトカムに関する2群間の比較により量的に検討した。さらに介入の効果を質的に検討するために出生前に看護介入により具体的となった自分なりの父親役割行動と効果的な出生前教育の内容を面接調査した。また出生後も実際に行っている父親役割行動と効果的な出生前教育の内容を収集した。得られたデータを帰納的に分析し、考案した看護介入プログラムと対応した。

(6) 倫理的配慮

本研究は、千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会において承認後、開始した。研究実施時は、自由意志の尊重、個人情報・プライバシーの保護、安全性の保障等について遵守した。

4. 研究成果

(1) 介入群および対照群の対象特性

本研究では最終的に介入群10名、対照群31名を対象とした。ただし介入群1名は、多忙を理由に、産後2か月時のアンケート調査の結果は得ることができなかった。基礎情報を分析した結果、両群ともに高学歴で、妻の年齢以外統計学的に均質であった。学歴は、大学卒業以上が介入群7名(77.8%)、対照群23名(74.2%)であった。本看護介入は、1回につき2組の対象者が参加した。計5回の出生前教育を実施した。

(2) 看護介入プログラムの効果

看護介入プログラムの効果を2群間で比較した結果、出生前後の EPDS 得点ともに有意差は認められなかった(出生前 $p=.557$, 出生後 $P=.455$)。出生後 EPDS 得点が9点未満であったのは介入群9名、対照群28名であった。また出生前 QMI 得点と出生後 QMI 得点の両群を比較した結果、介入群と対照群に有意差は認められなかった(出生前 $p=.726$, 出生後 $P=.610$)。出生前後の QMI 得点の時期の比較は、両群ともに有意差は認められなかった(介入群 $P=.650$, 対照群 $P=.415$)。両群の QMI 得点を介入群の有無と時期の2元配置分散分析をした結果、交互作用、主効果ともに

有意差は認められなかった。PSI-SF 得点の両群の比較では、PSI-SF 総得点 (P=.840)、子どもの側面総得点 (P=.597)、親の側面総得点 (P=.365) でいずれも有意差は認められなかった。

(3) 考案した看護介入プログラムの最終・上位目標 (出生前・出生後) の達成度

児の出生前の最終目標である、自分なりの父親役割行動を具体的かつ実践可能なレベルで考えることができるは、全員が具体的に自分なりの父親役割行動を考えられており、達成できたと評価した。また 1~5 の上位目標も、自分なりの父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容から達成できたと評価した。児の出生後の目標である、児の出生前に具体的にした父親役割行動を実践することができるは、育児や妻への精神的支援は全員が実施できていた。特に看護介入で実践した沐浴や更衣等の育児は全員が実践していた。しかし、一部の家事や生活習慣の修正の実践ができなかったと述べた対象者もいた。

(4) 自分なりの父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容

児の出生前に得た、自分なりの父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容は、158 のコードを抽出し、その意味内容の同質性、異質性に基づき分類し、31 のサブカテゴリーとなった。さらに同様に分類し、最終的に 6 つのカテゴリーとなった。この 6 つの看護介入の内容は「父親として基本的な育児技術・知識の獲得を促す支援」、「自分たちなりの産後の生活を構築する支援」、「父親役割準備行動や課題の明確化を促す支援」、「母親の身体的精神的負担と具体的な父親役割の理解を促す支援」、「親役割モデルと親同士の交流の場を提供する支援」、「父親を中心とした体験学習の提供」であった。また児の出生後に得た、自分なりの父親役割行動を考えることにつながった効果的な出生前教育の内容は、143 のコードを抽出し、その意味内容の同質性、異質性に基づき分類し、26 のサブカテゴリーとなった。さらに同様に分類し、最終的に 6 つのカテゴリーとなった。6 つの看護介入の内容は、「自分たちなりの育児方法・目標を明確にする支援」、「夫婦で話し合い子育ての考えを共有する支援」、「初めて父親になる人の立場にたった根拠に基づく情報提供と基本的育児技術の獲得支援」、「自分たちの産後の生活を現実的に受け止め父親役割の認識を促す支援」、「父親中心に親同士が交流し情報を得るための支援」、「父親が安心できる学級環境と教材の提供」であった。

5) 改良版看護介入プログラムの開発

出生前後の質的結果より、いずれの目標も達成していたが、対象者の立場に立って焦点化・具体化されていなかった一部の上位目標、看護内容を修正し、改良版看護介入プログラムを作成した。

以上の結果より、看護介入プログラムの効果である EPDS 得点、QMI 得点、PSI-SF 得点のいずれも有意差は認められなかった。これらの理由として、両群ともに育児に対して積極的な男性の集団であったことが影響していると考えられる。夫婦関係満足度では、中島ら¹⁰⁾の調査結果と比較しても、本研究対象者は平均的な夫婦関係満足度であったと考える。そして介入の有無及び時期による両群の差は認められなかった。両群ともに、もともと夫婦関係が良好であったと考えられ、父親になることに積極的な男性の集団であったと考える。

また看護介入の目標達成状況は、介入群全員が看護介入後に、児の出生前に自分なりの父親役割行動を具体的かつ実現可能なレベルで考え説明することができ、児の出生前の最終目標を達成できていた。このことから本看護介入が目標に合致した内容だと考えられる。児の出生後の最終目標では、出生前に具体的にした父親役割行動のうち、育児や妻への精神的支援は全員が実施でき、本看護介入の効果があったと考えられる。Márquez F ら¹¹⁾の調査でも、父親は積極的に育児に関わろうとする体験をしている。父親にとって具体的に考えることができた育児や妻への支援は、積極的に行きやすかったと考える。一方、一部の家事や生活習慣の修正は実際に実践することが難しかった。これは本看護介入から出生までの時間が短い対象者もいたことから、対象者は児の出生後の生活習慣の修正が必要だと気づいても、出産までに仕事の調整が難しかった可能性がある。これらをふまえ、本看護介入によって父親役割行動の実践につながったことが評価できるとともに、さらに児の出生後に、その時の父親、母親、児の状況に合わせた専門家による支援が必要であると考えられる。

研究対象者を出産施設等で便宜的に募集したが、両群ともに高学歴で、育児に関心の高い、初めて親となる男性であったことが研究の限界である。今後の課題は、本看護介入プログラムを臨床の場で実践するために看護職者への研修会を行い、実践を経て、現場で活用しやすい看護介入プログラムの内容を検討していくことである。

1) 厚生労働省、平成 29 年度雇用均等基本調査、2018、

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-29r.html> 最終アクセス日 2019/07/21

2) 国立社会保障・人口問題研究所、第 5 回全国家庭動向調査 現代日本の家族変動 (2013 年社会保障・行動問題基本調査) 第 5 章 夫と妻の家事分担と夫の家事遂行、2013 年、<http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/Mhoukoku/Mhoukoku.asp> 最終アクセス日 2019/07/21

3) 櫻沢亜希子、大月恵理子、鈴木幸子：生後 3~4 か月の第 1 子をもつ父親の育児不安と抑うつ状態、日本母性看護学会誌、第 13 巻第 1 号、9-16、2013

4) 樋貝繁香、遠藤俊子、比江島欣慎、他：生後 1 か月の子どもをもつ父親の産後

うつと関連要因、母性衛生、第 49 巻 1 号、91-97、2008

5) Ferketich, S. L., & Mercer, R. T. (1995). Predictors of role competence for experienced and inexperienced fathers. *Nursing Research*, 44(2), 89–95. <https://doi:10.1097/00006199-199503000-00005>

6) Galinsky, E. (1987). *The six stage of parenthood* (p. 41). Boston, MA: Addison-Wesley Publishing Company.

7) 木越郁恵、泊祐子：周産期における夫の父親役割獲得プロセス、*家族看護学研究*、第 12 巻第 1 号、32 - 38、2006

8) 樋口倫代：現場からの発信手段としての混合研究法 量的アプローチと質的アプローチの併用、*国際保健医療*、第 26 巻第 2 号、p107-117、2011

9) 森田亜希子、森恵美、坂上明子：初めて親となる男性の父親役割獲得を促進するパタニティポートフォリオの開発、*日本母性看護学会誌*、Vol.21 No.2 2021

10) 中島久美子、早川有子、常盤洋子：妊娠期および産後における夫婦の関係性 夫婦関係満足度、妻が満足と感じる夫の関わりの関連、*母性衛生*、第 57 巻 1 号、p82-89、2016

11) Márquez, F., Lucchini, C., Bertolozzi, M. R., Bustamante, C., Strain, H., Alcayaga, C., & Garay, N. (2019). Being a first-time father. Their experiences and meanings: A Qualitative Systematic Review. *Revista Chilena de Pediatría*, 90(1), 78–88. <https://doi:10.32641/rchped.v90i1.821>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Akiko Morita	4. 巻 24
2. 論文標題 Prenatal intervention program for Japanese first-time fathers to adapt to the paternal role: A mixed methods study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nursing and health sciences	6. 最初と最後の頁 183-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/nhs.12914	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森田亜希子、森恵美、坂上明子	4. 巻 21
2. 論文標題 初めて親となる男性の父親役割適応を促進するパタニティポートフォリオの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本母性看護学会誌	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32305/jjsmn.21.2_53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森田亜希子
2. 発表標題 初めて親となる男性の父親役割適応を促す出生前看護介入プログラムの開発
3. 学会等名 第22回日本母性看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森田亜希子、森恵美、坂上明子
2. 発表標題 父親役割獲得を促す出生前看護介入プログラムの開発 -初めて親となる男性のためのPaternity Portfolioの開発-
3. 学会等名 第20回日本母性看護学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------